主の公現

マタイ 2・1-12

2024.1.7　9：30 ミサ
カトリック高円寺教会
主任司祭　高木健次神父

今日、わたしたちは主の公現、救い主が全ての人の前に示されたという神様の恵みをお祝いする祭日のごミサをお捧げしています。今日の福音朗読では、毎年読まれる個所ですが、東の方からの占星術の学者たち――不思議な登場人物ですが――がやって来て、そして母マリアと共にいる幼子イエスを拝み、そして貴重な贈り物、宝物を御前（みまえ）にお捧げしたという出来事が朗読されました。

古代の世界において、王様のところに贈り物を持って来るということは、そのお返しとしてもっと沢山の素晴らしい物を携えて帰ることができる、そういう期待を持って他国の使節がやって来るということです。

聖書の中では、イスラエルが繁栄していた頃のソロモン王のところにはいろんな国から贈り物を携えた人たちが来ました、シバの女王も来ました、そういうのが出て来ます。そういう人たちは贈り物を携えながら、しかし沢山の豊かな物を携えて国に帰って行くわけです。

日本の歴史でも、遣唐使とか、そうですね。日本のいろんな産物を持って中国に行くっていうのは、帰りにもっと沢山のいろんな宝物をもらって、というか、積んで帰って来れる、そのために行くわけです。

そういう意味では、では、聖書が「まことの王である」というふうに示している、お生まれになったイエス様、まことの王である幼子イエスのところに贈り物を持ってやって来た、外国から来たこの占星術の人たちは何をもらって帰ったでしょうか。聖書のお話によれば、なんにももらっていない、ということになります。むしろ、宝物を返すことができない貧しい幼子のおうちに行って、礼拝して、贈り物として宝物をお捧げしました、ということそのものの中に神様の恵みを見出すというのが、聖書の言いたいことなんではないかと思います。

自分たちが持って来たこの高価な贈り物、でもそれをお返しすることができない幼子のところに置く、そのことそのもののうちに既に神様の恵みがある、というわけで

す。それは、わたしたちが、相応しい者ではないのにご自分の全てを与えてくださる神様に似た者となる、そういう恵みが、ほんとの意味で神のもとに、救い主のもとに行った人がいただく恵みだからです。

その恵みについて、毎年クリスマスの日中のミサの中の福音で朗読されるヨハネの福音書では、「みことばはご自分を信じた者たち、ご自分を受け入れた者たちに神の子となる恵みを与えた」というふうに表現しています（ヨハネ 1・12 参照)。「神の子となる」っていうのは、神様と似た者となる、あるいは神様と似た者である人間の本来の姿をとる、本来の人間性を回復する、ということだと思います。

それは、自分は何をもらえるのかということに絶えず関心があるのではなく、他(ほか)の誰かのために、損得勘定ではなく純粋に他の誰かのために自分の大切なものを渡そう、そういう気持ちの中に神様がおられる、あるいは神様がお造りになった人間の本来の姿がある、そういうことをイエス様が生涯をかけてわたしたちに示してくださった、そういう恵みに基づいていると言えると思います。

だから、この博士たちが、何もお返しのできない幼子に宝物を渡したよ、ということそのものの中に、既にその博士たち、占星術の学者たちが、その瞬間、神の似姿になっているという、そういう恵みを頂いているというわけです。

わたしたちも互いに、誰かのために自分の大切なものを渡すことがあると思います。また、そのような経験が既におありではないかと思います。大切なものというのは、なにも物質のことだけではない。時間であったり、心の中の場所であったり、そういうものを含めて、他(ほか)の人のために自分の大切な何かを渡そうとする、その時こそ、本来の人間性がわたしたちの中に示されている、また、神様の似姿が示さている、そういう意味で、主の公現、神様がこの世に示されている瞬間であると言うことができると思います。

ですから、わたしたちがいつもこのように、この占星術の学者たちのようにイエス様の御前(みまえ)にやって来て礼拝していますけども、「神様のために洗礼を受けてあげました。そして毎週のミサに出てあげてます。さあ、お返しに何をくれるんですか。わたしが望んでいるこの出来事をください」っていうような思いだけで集まっているならば、神様が既にわたしたちに渡そうとしている本当の恵み、ほんとの人間性、神様の似姿であるほんとの人間になっていくという恵みをいただきそこねてしまうのではないかなあと思います。わたしたちが日常において、特に困難なときにこそ、自分の

いろんな問題の中だけに関心を向けるのではなく、他(た)の人に開かれる、そのことそのものが神様の恵みである、それを忘れないためにいつもわたしたちは神様の前に集まって恵みを願うのだと思います。

まあ、こう申し上げるときに、しかし心の片隅に忘れてはならないなあと感じるのは、今日の福音の中での他のもう一つの登場人物たちです。ヘロデ王や祭司長や律法学者たちです。その人たちは救い主がどこにいらっしゃるのかということを、聖書を通して正確に知っていました。しかしそこに出向いて礼拝するということはなかったわけです。その神様の恵みに開かれていない、そういうことになるわけです。

わたしたちも、何が大切なのか、「ああ、互いに助け合う、他(ほか)の人のことを考えるのは大切だ」って分かっていてもそこに踏み出そうとしなければ、占星術の学者たちのようではなく、ヘロデ王たちのよう、ということになってしまうでしょう。

わたしたちは、今日ここで「主の公現」のごミサをお捧げして恵みをいただく、そのために集まっているわけですけども、そんなわたしたちがヘロデ王たちのようではなく、占星術の学者たちのように御前(みまえ)に行って、そして他(ほか)の誰かのために自分の大切なものを使うことができる、そういう者に変えられていくように、ほんとの意味での人間性をいただくことができるように、神の似姿になっていくように、その恵みを願い合いながら、このごミサを通して、主の御前にある、そのことを、まことの喜びへの道を改めて思い起こしたいと思います。

ミサ説教はカトリック高円寺教会ホームページの「ミサ説教」のページにも掲載されています。

PC　http://www.koenji-catholic.jp/cgi-bin/wiki/wiki.cgi

携帯　http://www.koenji-catholic.jp/mobile/